

「河越千句」について

山野清二郎 (高十二回)

序

日本古典文学の世界において、河越の名が全国的に知られている作品と言え、恐らく連歌「河越千句」であろう。文明二年(一四七〇)正月十日から十二日にかけて行われたというこの連歌会は、中央界で一流と目されていた歌人の心敬や連歌師宗祇を招いて、河越城築城に与った太田道真の主催のもとで開かれた。この価値ある作品は、意外にも研究があまりなされておらず、当川越においても市民はその名を知りつつも読んだ者は極めて少ないらしく、「河越千句」に関して出版された本も絶えて無い。これほど川越が注目を浴びる世になって来ていながら、全国レベルの作品に誰もが無関心でいられるのは、不思議な現象と言わねばなるまい。

ここでは、その「河越千句」について、少しく気づく点に言及してみることとした。

一

「河越千句」の成立にあたっては、心敬・宗祇の存在が大きく関わっている。心敬は紀州の人で、僧にして歌人・連歌作者。「芝草」「ささめごと」の著作で知られ、一四五〇年前後の都で和歌・連歌両面にわたって活躍し、天皇家の連歌会にも招かれるほどの実力者であった。しかし、世は戦乱の時を迎えていた。応仁元年(一四六七)、乱

前夜の京都をあとにして心敬は、太田道真の被官で江戸に本拠を持っていた豪族鈴木長敏に迎えられて、海路関東にまでやって来、品川に草庵を結ぶことになる。心敬の周辺には、長敏のほか「河越千句」にも名が見える大胡修茂・鎌田満助・栗原幾弘などの被官や国人がとりまいていた。

一方の宗祇は、閑歴不明な点が多いが、人生後半に連歌師としての地位を獲得。弟子を抱え、様々な人と交遊関係を持ち、文正元年(一四六二)京を去って東国に下向して来ている。彼の場合は、関東に留まり続けたわけではなく、時折関西へも足を伸ばしてはいるが、この東国遊歴中に心敬と出合い、強い影響を受けている。彼は武蔵国において幾つかの連歌書を著し、また後年自らの連歌作品を撰集しているのであるが、その中の「萱草」・「老葉」(再編本)・「宇良葉」などの家集を見ると、彼が当国においてたびたび連歌会にいらなっていることが知られ、特に太田道真の山家(越生の住まいか)に身を寄せていたり、道真の子道灌とも交流のあったことも知り得て、宗祇も心敬と並んで太田氏と密なる関係を結んでいたことがわかる。このことは、川越の歴史においてもっと注意されてよい事柄であると思われる。

二

ここで、連歌の形式のことについて少し触れたい。連歌はもとほ短歌の上句五七五に下句七七を付けて一首となしたもので、これは一句連歌(近代以降、短連歌と称す)と呼ばれ、古くは『万葉集』に作例がある。そのうちに、下句起こしの連歌が始められると、下句に上句、さらにその上句に下句が付けられるというように、句が次々と続けられる形になり、これを鎖連歌と呼んだ。短連歌は二人で作るため、言葉のしゃれなどで上繋がることが多かったが、二句以上繋がることとなくなり、短連歌と鎖連歌とは内容上変化が生じる。やがて、この鎖連歌が百句続いたものを一まとまり(百韻)とする規則が鎌倉時代に生まれる。かく定まったものを長連歌と称し、鎖連歌と区別する専門家もいる。この百韻を十つらねたものを千句と呼んだ。「河越千句」は、これである。

百韻でまとまりを成すということとは、百韻詠み終えたと、そこで打ち切りとし、新たに次の百韻を詠み起こすという形式になる。言いかえれば、千句ということとは、十回の出發があるということになる。そのそれぞれの最初の句を発句という。これは、必ず五七五の句で、その連歌興行の季節を詠み込まねばならず、また一句として言い切つていなければならぬ。つまり、定型・季語・切れ字が整っているということ、これも鎌倉時代初期以来の規則である。そうすると、百韻の始めというものは極めて重要になり(千句ともなればさらに)、初心者や若輩はこれを遠慮し、一座の堪能に譲る。特に客として迎えた人がいれば、当然その人が詠むはずのものとな

る。そこで、「河越千句」は、心敬がその発端を担い、宗匠役となっているのである。

発句に続く七七の句は、脇句というが、これは一座の主人が詠むべきもの故、この「河越千句」の主催者は、太田道真であったことが確認されるわけである。脇句は発句の季節を受けて、それに寄り添うように工夫される。

脇句に続く五七五の句は第三と呼べ、この句からは、発句・脇句から離れて新しい境地をめざして詠まれ出す。多く「て止め」の形をとる。こうした規則を踏まえて「河越千句」を眺めてみると、発句・脇句の部分が、はつきりとこの連歌会の行われた場の状況を語っていることがわかる。最初の百韻の一巡を次に示そう(以下に掲げる本文は、『続群書類従』巻第四百七十五の「河越千句」から採った)。

三

朝何第一

梅園にくさ木をなせる句ひかな

庭白妙のゆきのはるかせ

うくひすの声は外山の陰沓

野辺にうつれる道のほるけさ

ならはすよいつくの月を旅まくら

都いつれはみし秋もなし

冷しくしくる、空のくれそめて

雲より遠の入あひのかね

草の戸に人も音せぬ山ふかみ

心敬

道真

宗祇

中雅

印孝

長敏

永祥

義藤

修茂
ほのかに残るまつのした道
満助
水ほそく岩根かくれにつたひきて
長利
いそへはるかに汐はみちけり
興俊

発句の「梅園にくさ木をなせる句ひかな」は、言うまでもなく、河越城内の三芳野神社境内の梅園(校歌の「社頭の梅」)であろう。一面に梅の花咲く園に芳香が満ちている。その香がこれから萌え出ようとしている草や木を促すように漂っている。そういう様子を詠んだものであろう。

三芳野神社の梅は、当時いかほどの本数があつたかは定かでないが、享和元年(一八〇一)に成つた地誌「武蔵三芳野名勝図会」の三芳野天神社の項に載る東都の燕志という俳人の句に

いろはにて又ミよし野や神の梅とあるのが一つの目安になる。これは社前の梅が、秋に「色葉」即ち紅葉した時の情景もまた「見よし」という意味の句と思われる。そして「いろは」は「いろは四十七字」をも加味していると考えられるので、梅の木がそのくらしいの本数あつたのだろうと推測される。勿論これは「河越千句」よりも、三百年以上も後の光景のため、そのままにはあてはめられないが、かなりの本数あつたのであろうことは、道真の脇句「庭白妙のゆきのはるかせ」によつて窺える。その梅の花が、庭一面に雪ふり積もるが如く春の風に舞つていよう意である。白梅が雪に譬えられ

る技法は、すでに万葉時代からのもの。このように発句・脇句は真実の情景に基づいて詠んでいる故